

中国業務通訊

横井

2022年回顧

評論家・加藤周一（1919～2008）さんは2008年12月に亡くなった。加藤さんは1984年7月から亡くなる半年前の2008年7月まで24年間、朝日新聞に毎月1回「夕陽妄語」というコラムを寄せていた。取り上げたテーマは日本と世界の政治、経済から文学、美術、音楽まで地球上の神羅万象を論じた。夕陽妄語は近代日本のエッセイ、随筆の名文だ。いまの新聞、雑誌で読むに値するエッセイ、随筆に接したことは無い。小学生の作文程度のエッセイ、随筆が多い。



1950年代、三井鉱山
本社医務室勤務。

1997年11月19日の夕陽妄語に「老年について」を書いた。ちくま文庫「夕陽妄語2」に所収。全文を一読ください。

『・・・(岡山県立美術館で牧谿の)『老子図』見た後で、私はもう一度(国立能楽堂で見た観世栄夫の)『檜垣』の老女を想い出し、老いとは何かを考えた。もちろんそれは心身の衰えである。眼がかすみ、耳が遠くなり、脚がおそくなる。もの覚えが悪くなり、喜怒哀楽の情がうすく、注意の持続も短くなる。いわゆる「枯淡」は衰えの美称にすぎず、「老成円熟」は積年の習慣の言い換えにすぎないだろう。しかし、この世のなかに、なすべきことはあり余るほどあり、なし得る事が少なくなっても、個人がその小部分に係るにすぎないという状況は、老若男女においても変わりがない。昔も今も、憂うべきものは多く、憎むべきものは多い。知的好奇心の対象に限りがないことは、いうまでもない。しかるに現実に愛し、憎み、知るものが、涯のない世界の、きわめて小さな部分にすぎないということは、老いの至るに及んでも、全く変わらない。人生の朝と夕暮に本質的なちがいはないように思われる。



牧谿・「老子図」岡山県立美術館蔵

本質的なちがいがあるとすれば、それは青年の後には老年が来るのに対し、老年の後には死が来るということだけだろう。しかし語ることができるのは、生であって死ではない。語ることは人生に属し、死は人生の否定にすぎないからである。語ることは人生に属し、死は人生の否定にすぎないからである。否定は思考の前提（論理用語）の一つであり、思考の対象ではない。故にあの聡明な古代中国人もいった、「我生を知らず、いわんや死おや」と。花を眺めているときにはその散ることを思わない。舞を見ているときにはその終わりを考えないのである。』

このコラムは次の一言に集約されていると思う。「人生の朝と夕暮に本質的なちがいはないように思われる。本質的なちがいがあるとすれば、それは青年の後には老年が来るのに対し、老年の後には死が来るということだけだろう。」

老年とは肉体と精神が衰えることである。老年になると人生は短くなるが、話は長くなる。老年

になると耳は遠くなるが、便所は近くなる。

加藤さんは夕陽妄語の12月にはその年の回顧を書いた。私も加藤さんにならい、今月の記事は2022年回顧とする。

加藤さんがこの「老年について」を書いたのは78歳の時だ。私はいま74歳だ。私がなぜこの文章に共感を覚えるのだろうか。一つは私が70歳を過ぎ、老年に達したこと。もう一つは3年前に命に係わる病を得たこと。

私は2019年11月に都内に出かけたら、心臓の不整脈により意識不明になり、救急車で済生会中央病院に運ばれた。その後、心臓病専門病院の大和成和病院に転院し、AED付きのペースメーカー（ICD）の埋め込み手術を受けた。それ以来毎日2回薬を飲み続けることになった。私はいま一級障害者手帳を持つ。私が主治医にこう聞いた「この薬は副作用がないのですか？」主治医は「不整脈で命を落とすことはない。どんな薬も副作用がある、この薬の副作用が出るのは20年後だ。いま71歳だから20年後、91歳の時には薬の副作用ではなく、ほかの要因が寿命を左右しているでしょう」といった。ユーモアのある主治医だ。この時、私は人生に限りがあることを認識した。手術から今年で3年が過ぎた。



毎年1度の家族旅行。2022年8月箱根。長女家族4人、長男家族4人、我が夫婦2人、合計10人。交通費、宿代、食事代などすべて我が家持ち。子供たちは大喜びだ。

私は入社した若いころ、人間は歳を経るにつれ年相応の分別と人徳が備わると考えていた。しかし、30歳過ぎてから仕えた多くの上司は分別と人徳を備えていなかった。自ら老年に至り、人間の分別と人徳は後天的に得られるのではなく、生まれながら備わるものだと考えるようになった。

毎年、知人、友人の亡くなった知らせを受け取る。誰であれ他人の死の重みがすべて同じではないだろう。親しい友人の死は重く、赤の他人の死は軽い。私には、今年亡くなったイギリスのエリザベス女王の死に悲しみを覚えるが、今年亡くなった我が国のやんごとなき元総理大臣の死には悲しみを覚えない。国家が国民に特定の人間の死に悲しみを強要するのを私は好まない。

いま日本、世界で起きていること。2019年に発生した新型コロナは来年で4年目となる。海外の国々は新型コロナをほぼ克服し、正常な生活に戻りつつある。しかし、日本だけは政府と医師会が癒着して効果の無い対策に固執し、収束の見通しはない。

安倍政権、菅政権、岸田政権で日本の政治は劣化の一途をたどってきた。政権にしがみついただけが目的の岸田政権で政府、政権は機能不全に陥り、日本は国家の体をなしていない。腐敗し墮落した自民党政権。日本は医療崩壊と財政破綻で遠からず行き詰まるだろう。

今年2月に始まったウクライナ戦争は終結の見通しはない。世界の国々はロシアにつくか、ウクライナにつくかの選択を迫られた。

プーチン、習近平、バイデンと大国指導者の劣化が進む。リーダー不在の国際社会。

今年2022年は疫病と戦争が世界を揺さぶった年だった。共通するのは身近に迫ってくる「死」だ。人々は寿命を全うして死を迎えるか、疫病、戦争により不本意な死を迎えるか。どこの国でも国家が人々の生命と財産を守ってくれるという保障はない。国家が人々に牙をむいたら、人々は為す術がない。これからは人々が自国政府により死に追いこまれる時代がくるだろう。